

# 経済史 2 ( 経済史 B ) 平成 17 年度京都大学経済学部講義 ( 担当:坂出健 )

## 教材 3.1 ( 2005 年 10 月 18 日 )

### 第 3 講 多角的貿易システムの構造とブリティッシュ・エンパイア

#### 【 1 】 19 世紀末から第一次大戦までの多角的貿易・決済システム

##### [ 1 ] 英帝国に対する再解釈

・ 第一次大戦でイギリスが維持・発展させようとした権益とは？

「イギリス産業の競争的地位の後退はイギリス資本主義の世界的な主導権の喪失を意味したのか？」

従来の考え方

1820・30 年代：産業革命を達成 圧倒的な生産力

19 世紀中葉：「世界の工場」

イギリスを唯一の工業的中心にし、その他の後進農業諸国を放射線状に結んだ双務的貿易決済システム

古典的世界市場

19 世紀末～20 世紀初頭：米独の台頭 産業衰退 - イギリス：ミドルパワーへの転落

近年の再評価

- 多角的通商決済の中心としての位置

##### [ 2 ] 多角的通商システム

・ ソウル ( 1960 年 ) による概観

##### 図 1 18 世紀中葉の決済形態

・ イギリスの輸出品 - 中国で売れず。 銀流出

19 世紀末～20 世紀初頭のイギリスを中心とした世界経済をどうみるか？

・ 複数の中心工業諸国と周辺農業地域をネットワーク状に取り結ぶ世界的規模の多角的貿易決済システム

イギリス：

・ ヨーロッパ・アメリカとの貿易 輸出減・輸入増 入超

・ インド・オーストラリアなど帝国諸国に対する貿易・貿易外黒字により決済

ドイツなどヨーロッパ工業国：

・ インド・オーストラリアから原料・食糧品など一次産品輸入拡大し入超

・ イギリスに対する出超とアメリカからの貿易外受取勘定によって決済

アメリカ：

・ 貿易収支 イギリス・ヨーロッパ諸国に対して出超構造

・ 貿易外収支 支払勘定

##### [ 3 ] 「ポンド体制」1880 年代から第一次大戦まで

・英は貿易収支上の巨額な赤字にもかかわらず、利子・サービスなど貿易外勘定の受取によって、20世紀初頭には毎年1億ポンドを超える膨大な海外投資を継続

「世界の工場」から「世界の銀行」へ

英の海外投資：世界的な多角決済のための中軸的資金を供給

實際上、ロンドン金融市場（シティ）における海外資本発行の媒介者であったマーチャントバンカーに担われる。

・ロンドン金融市場

・豊富な資金を世界一安い利率で借り入れることが可能

・ロンドン経由による貿易金融のコストも最も低い

・世界の貿易は、ロンドン宛手形によって決済される。

・ポンド資金の大規模で継続的な供給 国際通貨としてのポンドの地位確立

イギリスはイングランド銀行を頂点とするロンドン金融市場の機能を通じて国際決済資金の膨張と収縮を調整する世界経済の統括者の役割

#### [ 4 ] イギリスを中心とした国際資金循環

表1 イギリスの貿易および地金収支、1910年

表2 イギリスの国際収支、1910年

図2 1910年の世界の決済形態

英を起点とし再び英に還流してくる世界的規模での資金循環

イギリスからヨーロッパ工業国・アメリカへ貿易決済資金が支払われ、

ヨーロッパ工業国・アメリカは、その資金を、インドなど周辺農業国からの輸入決済に使用

イギリスは、それらの資金を貿易・貿易外勘定の支払いによって回収する。

・英帝国：

インドからの植民地的収奪

カナダへの投資（帝国への導水路）を通じて世界市場に放出

イングランド銀行の相対的に僅少な金準備を南アフリカの新産金を掌握するロンドン金市場が補完し、国際通貨としてのポンドの信用を維持

・むしろこの時期には世界経済におけるイギリスの主導性は強化されていた。

・英に資金が還流してくる最重要の回路 インド

インド一国でイギリスの対外支払勘定の5分の2以上をファイナンス

英はインドを国際収支上の「安全弁」としながら海外投資を拡大

ソウル - 第一次大戦前のイギリスの貿易・国際収支の動向

・ヨーロッパ工業国とアメリカに対する大幅な入超 インドに対する貿易・貿易外収支の黒字によって決済 イギリスの巨額の海外投資を可能にする。ポンド資金の円滑な世界的循環

## 【2】チェンバレン・キャンペーンをめぐる「帝国」と「自由貿易」

### ・アメリカ・ドイツなどの工業的追い上げにどう対応するか？

1870年代以降、他の欧米諸国が保護貿易政策に転じて急速な工業化

イギリスはほぼ単独で自由貿易政策維持（「一方的自由貿易政策」） 多角的システムの維持

1903年5月 ソールズベリ統一党（実質保守党）内閣の植民地大臣ジョゼフ・チェンバレン - 帝国関税同盟・関税改革提唱

（内容） ・工業・農業保護関税

・帝国特惠関税の新規導入 食料と原料の帝国特惠を基礎に帝国内自由貿易

（目的） 産業保護

帝国統合

チェンバレン・キャンペーン 統一党内部分裂

政治的諸勢力が「自由貿易擁護」の一点で結集。 - 「高いパン」(食料関税)批判

### 図3 「高いパン」とチェンバレン店主

1906年1月 総選挙

保守党 - 関税改革 - 「関税によって保護された閉鎖的自給帝国」

自由党 - 自由貿易政策堅持 - 「世界に開放された金融帝国」

・自由党が歴史的な大勝利（1915年まで単独政権）

ケイン・ホブキンス（ジェントルマン資本主義論）の評価 - 「産業利害に対する金融利害の勝利」

・「関税によって保護された閉鎖的自給帝国」ではなく「世界に開放された金融帝国」を維持。

## 【3】インド - イギリス帝国の「王冠の宝石」

### [1] 本国費と金為替本位制

「本国費(home charge)」 - 軍事費・行政費・鉄道証券利子など植民地統治の過程で必要とされた諸経費 - 19世紀後半を通じてインド歳出の約3割を占める。 - ポンドでの支払い(ポンド・ルピー間の交換比率に規定される)

1873年以降 - 銀価格下落 銀本位制採用するインド財政に打撃(ルピー下落 本国費負担増大)

1898年 インド大臣ハミルトン卿、インド通貨調査委員会(ファウラー委員会)設置

ファウラー委員会 - 金本位制採用による為替安定を勧告

(金貨は流通せず、ルピー銀貨鑄造再開)

ボーア戦争によるイングランド銀行の金準備不足 ハミルトン、ルピー銀貨鑄造収益をロンドンに送金して、金およびスターリング証券の形態で保有するよう要請

1898年 イングランド銀行にイア・マークされた金を引き当てに紙幣を発行する金準備紙幣法、発布  
(恒常化) 金為替本位制

#### 図4 インド金本位準備

### [2] インド省証券

インドの輸出入貿易は、ほとんどがロンドン宛スターリング手形によってロンドンで決済  
当該期 - インドは大幅な出超 インドから振り出されたインド輸出手形が常に相対的過剰になる。  
(ロンドンから金流出されるはず。) 現実には、**在ロンドン資産**としてロンドンにストックされる。

#### 図5 インド国庫残高

インド省証券 - インド貿易黒字に応じて販売され、インドへの金流出防止手段として機能  
1904年 インド大臣ブドロリックは、「本国費」確保のために限定的に売却されていたインド省証券を  
無制限に売却することに決定。

#### 図6 - インドの貿易収支とインド省証券売却額の推移

1903年までは、本国費とほぼ一致

1904年以降 - 本国費を大幅に上回る。

インドに流入するはずの金は、インドの**在ロンドン資産**として蓄積される。

・「イギリス本国に対する貿易外支払いをはるかに上回る膨大な輸出余剰の形成によってインドに流入  
するはずであった金は、インド省手形の無制限売却という人為的なメカニズムによって在ロンドン資産  
として蓄積された」(井上 82 頁)

1910年頃、在ロンドン資産は£4000万を超える巨額に インド担当大臣の管轄下に置かれ、長短期の  
スターリング証券(金融逼迫時には減価する危険性あり)に投資、金で保有される部分はイングランド  
銀行にイアマークされて同行の金準備の潜在的源泉となる。

20世紀初頭 - インドの多角的貿易決済網への本格的編入とロンドン金融市場を中軸とする国際金融  
メカニズムの確立

ケインズ『インドの通貨と金融』(1913年)におけるインド金為替本位制把握

### 設問

#### チェンバレン・キャンペーンはなぜ挫折したか？

[文献]

井上巽『金融と帝国 - イギリス帝国経済史 - 』(名古屋大学出版会、1995年)

木村和男編『世紀転換期のイギリス帝国』(ミネルヴァ書房、2004年)

秋田茂編『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』(ミネルヴァ書房、2004年)

S.B.ソウル『世界貿易の構造とイギリス経済』(法政大学出版局、1974年)

ケイン、ホブキンス『ジェントルマン資本主義の帝国』(名古屋大学出版局、1997年)

Floud and Johnson (eds.), The Cambridge Economic History of Modern Britain, Volume II  
(Cambridge University Press, 2003).